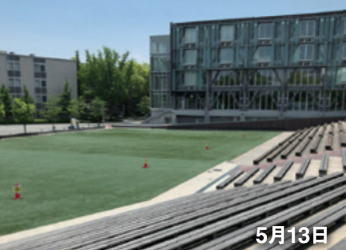




4月3日

KANSAI
UNIVERSITY

5月13日



5月22日



7月30日

CTL

Kansai University Center for Teaching & Learning

Newsletter

関西大学 教育開発支援センター
ニュースレター

August 2020
特別号



4月3日



5月13日



6月16日



6月16日

2020年度春学期の記憶

教育開発支援センター長 関口 理久子



人が未来を予測する時、自分のこれまでの体験や現在自分を取り巻く環境を参照しながら、思い描く。昨年6月に私が教育開発支援センター(CTL) ニュースレター(2019年6月 Vol.30) の巻頭言を執筆した時には、2020年度春学期実施予定の Web 版授業アンケートに思いを馳せていた。その号で編集後記担当者が、「令和の時代はどんな時代になるのか」という問いを発している。平穏な大学の日常の中での緩やかな変化への期待はあるが、まさかその平穏な日常が COVID-19 (新型コロナウイルス感染症) により奪われることなど私たちは誰も予測さえしなかった。

4月7日の政府による「緊急事態宣言」の発令に伴い大阪府による「外出自粛要請・イベントの開催自粛要請・施設の使用制限(5月15日まで)」が発令された。関西大学教育開発支援センターの主な状況を振り返ってみよう。

3月27日 「4月6日～4月18日は原則とし

て休講とする」という授業実施の基本方針が教職員へ提示。

4月1日～3日 教育推進部教員、CTL事務局職員、CTL 研究員による対面式での個別相談会とセミナー形式の相談会の開始。

4月8日～12日 セミナーの録画資料や質問を元にした資料を作成し、HP 掲載(以後春学期中継続)。学生向けにオンラインライティングワンポイント講座の実施。

4月9日 「4月20日以降は原則として「インターネットを活用した遠隔授業」を行う」ということが全学の学生および教職員へ掲示。

4月13日～7月22日 FD 相談会(日本語・英語)の継続的实施(全21回、延べ764人の教員が相談会を利用した)。

5月12日 「春学期開講科目の成績評価方法およびシラバス変更のお願い」が全教員へ掲示、15日にはシラバス確認のお願いが学生へ掲示。

6月13日 第23回関西大学FDフォーラム「遠隔授業のデザインを考える－人の縁を描く授業－」を開催。

7月1日～29日 Web 版授業アンケートの実施。

7月6日～31日 遠隔授業に関するアンケート(教学 IR)の実施。

7月17日 関西大学FDセミナー「コロナ禍の授業実践をふりかえり、遠隔授業の教育方法・評価方法を考える」を開催。

上記の間、一教員として、学生達の真摯に学ぼうとする姿勢、そして、教職員の方々のよりよい授業をしたいという姿勢に感動させられた。人が未来を思い描く時、その未来が明るく肯定的か、暗く悲観的であるかは、現在の状況と過去の記憶に依ることが大きい。この特別号に寄せられた教員の方々と学生のみなさんの声からは、関西大学の教育は力強く希望に満ちた方向へ向かうだろうという未来が思い描けることが何よりも嬉しいことである。

Contents

巻頭言

教育開発支援センター長 関口 理久子	01
--------------------------	----

遠隔授業の実践報告

法学部 教授 大津留 (北川) 智恵子	03
文学部 教授 柴田 一	03
商学部 教授 木村 麻子	04
社会学部 教授 池内 裕美	04
政策創造学部 教授 安武 真隆	05
外国語学部 教授 井上 典子	05
人間健康学部 准教授 小室 弘毅	06
社会安全学部 教授 西村 弘	06
環境都市工学部 准教授 豊田 政弘	07
化学生命工学部 教授 池田 勝彦	07
教育推進部 教授 山本 敏幸	08
教育推進部 准教授 岩崎 千晶	08
教育推進部 教授 三浦 真琴	09

ライティングラボ アカデミック・アドバイザー 藤田 里実	09
非常勤講師 小前 恭則	10
非常勤講師 中村 恵	10

遠隔授業の苦労話や工夫

法学部 教授 大津留 (北川) 智恵子	10
商学部 教授 木村 麻子	10
政策創造学部 教授 安武 真隆	10

事務職員からの報告

学生からの意見や感想

オンライン相談窓口 SA からの報告

オンライン相談窓口 SA からの川柳

教員向け相談会

NO.	実施月日	テーマ	担当者	参加者数(名)
1	4月1日	オンラインを活用した授業に関するFD相談会	山本、岩崎 多田、職員	18
2	4月2日	オンラインを活用した授業に関するFD相談会	山本、岩崎 多田、職員	29
3	4月3日	オンラインを活用した授業に関するFD相談会	山本、岩崎 多田、職員	18
4	4月13日	「インターネットを活用した遠隔授業」実施に関するオンライン説明会	山本	260
5	4月15日	「インターネットを活用した遠隔授業」実施に関するオンライン説明会	山本	55
6	4月17日	「インターネットを活用した遠隔授業」実施に関するオンライン説明会	多田	70
7	4月20日	「インターネットを活用した遠隔授業」実施に関するオンライン説明会	多田	28
8	4月22日	「インターネットを活用した遠隔授業」実施に関するオンライン説明会	岩崎	42
9	4月23日	「インターネットを活用した遠隔授業」実施に関するオンライン説明会	矢田	34
10	4月24日	「インターネットを活用した遠隔授業」実施に関するオンライン説明会	山本	8
11	4月27日	「インターネットを活用した遠隔授業」実施に関するオンライン説明会	多田	37
12	4月29日	「インターネットを活用した遠隔授業」実施に関するオンライン説明会	矢田	34
13	5月8日	「インターネットを活用した遠隔授業」実施に関するオンライン説明会	山本	10
14	5月13日	「インターネットを活用した遠隔授業」実施に関するオンライン説明会	岩崎	25
15	5月20日	シラバス変更に関するオンライン説明会	関口、山本 三浦、岩崎 多田、職員	54
16	5月28日	「インターネットを活用した遠隔授業」実施に関するオンライン説明会	岩崎、矢田	10
17	6月4日	「インターネットを活用した遠隔授業」実施に関するオンライン説明会	山本、藤田	14
18	6月12日	「インターネットを活用した遠隔授業」実施に関するオンライン説明会	三浦、多田	12
19	6月18日	「インターネットを活用した遠隔授業」実施に関するオンライン説明会	岩崎、矢田	3
20	6月25日	「インターネットを活用した遠隔授業」実施に関するオンライン説明会	山本、藤田	3
21	7月3日	「インターネットを活用した遠隔授業」実施に関するオンライン説明会	三浦、多田	0

※なお、No.1~3については対面で実施。 計 764

学生向け講座

NO.	実施月日	テーマ	担当者	参加者数(名)
1	4月6日	初年次教育の心構え	岩崎	38
2	4月6日	卒論執筆の予定を立てよう	多田	18
3	4月7日	ノートテイキング	藤田	78
4	4月7日	卒論のテーマを考えよう	多田	20
5	4月8日	レポートを書き始める前に	藤田	75
6	4月8日	卒論のアウトラインを作る	多田	13
7	4月9日	テーマを決めよう	藤田	62
8	4月9日	卒業論文の書き方	多田	15
9	4月10日	レポートの構成	藤田	71
10	4月10日	口頭発表の方法	多田	48
11	4月10日	スライド資料の作り方	多田	33
12	4月13日	実験ノートの書き方	多田	20
13	4月14日	実験レポートの書き方①	多田	20
14	4月16日	ライティングラボの活用 —文章をよりよくするために—	岩崎	
15	4月16日	実験レポートの書き方②	多田	20
16	4月13日	レポートにふさわしい表現	藤田	58
17	4月14日	引用と参考文献一覧	藤田	64
18	4月23日	関大 LMS 使い方講座	三浦	100
19	4月24日	ZOOM 使い方講座	藤田	144
20	4月30日	関大 LMS 使い方講座	三浦	35
21	5月1日	ZOOM 使い方講座	藤田	
22	5月21日	学外からの資料検索方法	藤田	142
23	6月16日	office365 完全活用! ～ノートテイクもプレゼンも～	山本	24
24	6月17日	office365 完全活用! ～ノートテイクもプレゼンも～	山本	36
25	6月30日	レポート・卒論・プレゼン なんでも相談会	藤田	2
26	7月2日	レポート・卒論・プレゼン なんでも相談会	藤田	9

計 1145

遠隔授業の実践報告



法学部 教授
大津留(北川)智恵子

3月にコロナで中止となった国際ワークショップが遠隔開催となり、初めて Zoom に出会いました。使い慣れた先生方がいろいろな機能を用いてプレゼンや議論をされる場面に、受け手側として参加した形になります。まさか自分が Zoom で授業をするとは思っていなかった頃ですが、実際に授業をするようになった時、学生から授業がどのように受け止められているのかを理解する上で、この経験が大変に役に立ちました。

授業は二つの形態で実施しています。学部ゼミと大学院の授業は、リアルタイムの Zoom です。画面共有でレジュメを見ながら報告し、議論へと移るのですが、人数の多い学部ゼミでは、ブレイクアウトセッションを利用することで、教室に近い形でグループ討論を実施できます。画面に教員の顔が突然加わった時のゼミ生の驚いた顔には、申しわけない気もするのですが、それにも気がつかず熱のこもったやり取りが続いていると、うれしくなって、そっと抜け出したりしています。ただ、ネット環境が不安定な学生の場合、画面を消して音声のみで参加してもらうこ

ともあり、全く教室と同じとはいきませんでした。

学部の講義は、事前にパワーポイント画面を用いながら録画したものをドロップボックスに入れ、関大 LMS にリンクを掲載する形で進めています。準備するものは通常の授業と同じはずなのですが、大事なポイントに対して学生の反応を確認することができないまま録画を続けるのは、精神的には辛いところがあります。また、講義録画と連動させた小テストの数も増やしたのですが、その採点に追われることも負担となっています。

学部の夏期集中ゼミも遠隔となったので、授業日程の半分は Zoom 録画を使いながら進め、残りの半分は補講期間にリアルタイムで実施します。課題の一つとして、コロナ禍の生活について Zoom 録画を提出してもらいましたが、「全ての授業で課題が出るのが辛い」という言葉が共通して語られていました。学生と教員の双方が、遠隔授業にストレスを感じていることを実感しました。ただ、「去年よりもたくさん勉強しています」という発言があると、ポストコロナの授業における改善課題を突きつけられたようにも感じています。



文学部 教授
柴田 一

遠隔授業の①リアルタイム遠隔授業、②オンデマンド配信授業、③教材提示による授業の3つの方法を、実施する授業の特性と、1つの授業でも授業内容によって使い分けました。

- 知識伝達型で教科書を指定している授業は③をベースに、文書では表現しにくい補足説明を②で行いました。
- 知識伝達型で教科書指定のない授業は②で行いました。
- 演習形式やアクティブラーニング形式の授業は①をベースに、グループワークに必要な知識伝達等は②で行いました。

いずれの場合も、対面授業で板書していた内容は、全て PowerPoint のスライドか Word の図入りの文書に移植しました。また②のコンテンツは、Dropbox で配信しました。

対面授業で使用していた映像媒体で、コピープロテクトの掛かったものは、教員側で再生・配信しても学生側の画面ではブラックアウトされました。したがって、同じもしくは同等の教材で、

昔使っていたアナログ映像の DVD を探し出し、それを Zoom で画面共有し、配信や録画をしました。

プレゼンテーションの授業は、プレゼンを PowerPoint でナレーション、自撮り映像付きで mp4 ムービーにしたものを事前に関大ファイル便で提出してもらい、これを授業で教員が Zoom で画面共有し、再生や配信をしました。質疑応答は、発表者と質問者が顔出しで行い、プレゼンの評価を受講生全員がその場で関大 LMS の会議室に投稿するようにしました。会議室の開室時間を制限することでアバター出席の抑止にもなりました。

グループワークでは、Zoom のブレイクアウトセッションは大変有効で、セッションに立ち寄ると学生の表情が生き生きしているように思えます。この授業では、各人が必ず何かの役割に就くという条件で、学生同士も対面で作業できない不自由な環境で、グループで1つの PowerPoint の mp4 ムービーを作成させましたが、共同作業の方法をグループ毎に学生自らが創意工夫しているのが印象的でした。

試験に関しては、ドロップダウン選択肢による1問に選択式解答欄が複数ある問題の出題、ランダム出題による問題の出題順のシャッフル、CBT 方式の資格試験と同じく前の問題に戻れなくする機能など、関大 LMS を活用することで遠隔授業においても対面授業で紙媒体による試験と同等の試験ができました。

遠隔授業の実践報告



商学部 教授
木村 麻子

専門科目および演習科目についてリアルタイム講義を Zoom にて行いました。

まず、専門科目については、第1回の講義時に履修者と講義形式を相談しました。Zoom の機能を使った投票の結果、動画を配信するオンデマンド型よりも Zoom を使ったリアルタイム型の希望者の方が多かったため、原則としてリアルタイムで講義を行うことになりました。理由として、「外出自粛で生活が不規則になったから」という声が聞かれました。ただし、投票結果から「本日の講義に通信環境が整わずに参加できなかった履修生を知っている」という回答もあったため、オンデマンド型で軽量サイズの資料配付と課題の提示も行うこととしました。リアルタイム型授業では受講生に「計算問題等の講義時間内に解答できる課題の提出」を求めましたが、オンデマンド型では「配付資料に加えて自身で調べて要約することによって理解を問う課題」の提出を求め、それぞれが90分程度の学習をするように促すこととしました。この講義形式については、第1回講義後に LMS およびインフォメーションシステムで掲示して欠席者にも意見を求めましたが、とくに反対意見はなかったため両型の授業を平行して行うこ

としました。結果として、就職活動等でリアルタイム型に出席できない履修者はオンデマンド型を受講して講義内容をフォローしていたようです。

また、リアルタイム型では、口頭またはチャット機能によって質問を授業中いつでも受け付けることとしました。従来は講義後に質問を受けることがほとんどでしたが、チャット機能を使った講義中の質問が毎回ありました。講義時間内に質問を受講者全員と共有することができ、理解を進めることができたように思います。このほか、講義中に受講者を指す際、家族が近くにいるなど声を出すことが恥ずかしいという受講生には、チャットでの回答を促すなどの配慮をしました。

次に、演習科目においても履修者と相談してリアルタイムで行うこととしました。Zoom のブレイクアウトルーム機能によって、グループごとの議論を促しました。対面型と異なり、教員がすべてのグループの議論を把握できませんが、できるだけ各グループのルームを巡回するように努めました。また、履修者から外出自粛に伴う社会的交流の減少や研究発表の機会逸失を心配する声が聞かれたので、実務家の招聘や他大学ゼミとの研究発表会などを行いました。例年は、夏季休暇中や後期まで遠方の実務家や大学との交流を行っていませんでしたが、Zoom や掲示板機能を持つアプリを使うことで物理的距離に関係なく円滑な議論を行うことができました。



社会学部 教授
池内 裕美

私の担当する専門科目は受講生が400名以上いる比較的大規模な講義です。よって、どのような授業形態をとれば全員が最後までついてきてくれるのか…、この講義形態を決めるのに一番悩み、多くの時間をかけました。というのも、遠隔授業が本格的に開始される直前、たまたま学部の役職上、学生たちがいかに不安がっていて、Wi-Fi 環境なども整っていないかを肌身で感じる機会があったからです。そこで、まずはこの“不安を取り除くこと”、“Wi-Fi 環境が不安定でも400名が確実に受講できる方法を取る”ことが最優先されるべき課題であると考えました。そして考え抜いた結果、非同期ながらも、「“臨場感ある”教材提示式オンデマンド方式」に挑戦することにしました。

この“臨場感ある”という点が私なりの工夫です。まず「学生たちの不安の根底は何か」を考えた際、やはり“一緒に受講する仲間がいないこと”だと思いました。そこで、この“仲間”を作るために次の2つの方法を取りました。①キャラクターの採用、②徹底したフィードバックの実施（他の受講生の声を紹介）。特

に①について説明すると、本講義のスライドには、授業をナビゲートしてくれる犬のキャラクターが登場します。彼の役割は“学生”であり、学生目線で授業内容に驚いたり、素朴な疑問を持ったります。それに対し、教師役も必要だろうと考え、安直ですが猫のキャラクターを用いました。授業は、始終、この“お調子者の犬”と“しっかり者の猫”の掛け合いで展開する仕組みになっています。また、受講生から「提示資料だけだと物足りない」という意見が出てくることも想定し、short video としてその回のポイントを5分程度の動画にして配信しました。これをナビゲートするのもパンダのパペットです。こうした動物のキャラクターを多数登場させたことにより、受講生たちは癒され、友だちと受けている感覚になり、かなりの不安が軽減されたようです。

その他の工夫としては、能動的に授業に参加してもらうために、次の3つの方式を導入しました。① Word の穴埋式資料の配付（これは日常から実施していますが）、②関連文献や映像の紹介とそれらのリンクの貼り付け、③択一式の小テストを毎回実施（かなり難問）。特に②と③はオンライン講義ならではの利点であったといえ、それは学生も同様に感じているようです。この3か月間、遠隔授業ということで、結局最後まで誰一人の顔も見られませんでした。しかし、一人ひとりの声に真剣に耳を傾けることができ、例年より受講生との心の距離は近かったように思います。



政策創造学部 教授
安武 真隆

春学期は、オンデマンドでの録画配信の講義と、Zoomを使った演習を実施してきましたが、緊急事態宣言の解除を受けて政策創造学部では、7月に1回生向けの講義や（一度も顔合わせをしていない）演習について一部対面方式が可能とする方針が出されました。そこで、180名の受講生がいる政治学入門1については、履修者を3分割し、3回のうち1回を指定して教室での受講（ただし希望しない者は、引き続きオンラインでの受講を認める）3回のうち2回は従来通りオンラインで受講という形式、演習については、最終回の一回のみ対面方式を試験運用することとしました。

事前に関大 LMS を通じて参加の是非についてアンケートをしたところ、講義科目については、未回答43%のうち、全く反応がない者が13%（24名、うち1回生は13名、これが事実上の脱落者と推定）関大 LMS などにアクセスはしたが態度を表明していない者が30%（54名）程度となりました。未回答のうち態度保

留組を両義的なものとしてカウントし直すと、参加希望は、28%（51名）、態度保留・両義的40%（19+54=73名）、参加希望せず18%（33名）無回答13%（24名）という分布でありました。演習科目については、10名の回答者のうち：希望・希望せずが、ともに4名、回答・態度保留が2名（未回答8名）となり、拮抗しました。受講生の中には、実家からの受講、交通費の負担、感染の不安の声も確認されました。

実際に実施してみると、第1回目対面講義（7月8日）では参加者は30名程度、2回目（7月15日）は20名程度、演習科目については、17名中2名の参加に留まりました。第1回目の対面講義では梅雨前線の停滞により大雨警報が発令されたこと、第2回目では7月に入り感染者の拡大が首都圏や近畿圏で確認されていることが、受講生（並びに保護者）の自粛ムードを高めたのかもしれませんが、なお、第3回目（7月22日）の対面講義は、実効再生産数で大阪府が全国で最悪となり、人口あたりの感染者数でも近畿圏の増加が著しく、関西の企業が在宅勤務を再び検討し始めたとの報道を受けて、中止としました。



外国語学部 教授
井上 典子

今学期、私は Zoom を使用した遠隔授業を行いました。外国語学部の「地域言語文化論」の授業を例にとり、遠隔授業における取組みを紹介させていただきます。

この授業では、シェイクスピアから20世紀以降の現代詩に至るまで、各時代の代表的な詩を取り上げます。まず、あらかじめ授業で扱う詩およびディスカッションピックを関大 LMS にアップロードしておきました。授業では、最初に私が時代背景や詩の基本的知識に関して PPT を学生全員と「共有」しながら解説した後、「ブレイクアウトルーム」機能を使って学生たちを小グループに分け、ディスカッションピックに従って話し合い、Word にグループの意見をまとめるように指示を出しました。授業の後半に、各グループが順番に発表し、私やクラスメートと意見交換を行いながら、詩に対する解釈の幅を広げていきました。

例年、英語でグループ発表を2回行いますが、今学期は、個人発表に切り替えました。学生は自分で考えたテーマで発表を作り、練習を重ねた後、Zoom を使い PPT を共有しながら自分の発表を録画するという形を取りました。

今学期の遠隔授業を通して、Zoom を利用したオンライン授業の利点も見えてきました。第一に、Zoom は授業時間中の学生たちの緊張感とモチベーションの維持にとても役立っているという点です。対面授業では、グループディスカッションも仲間同士で固まりがちですが、ブレイクアウトルームでは、毎回異なるメンバーと同じグループとなる上、私がその部屋にいつ入ってくるかわからない状況ですので、緊張感も生まれてきたように思えました。学生たちも、毎回メンバーが変わることで、クラスメートから多様な意見や解釈を吸収することができ、楽しんでいたように見えました。第二に、Zoom を使って自分の発表を録画することで、自分の発表を客観的に検証することが可能となったことです。録画した発表を自己分析することで、例えば、PPT が発表内容の伝達に効果的に使用されているか、アイコンタクトを含む表情やジェスチャーを意識しているかといった点に客観的に目を向けることができます。自己分析を繰り返しながら、発表内容を充実させ、パフォーマンス性の高い発表に仕上げていく過程は、対面授業での一回勝負の発表では叶わない利点があると感じました。

英詩の魅力をオンライン授業でどのように伝えることができるかと試行錯誤した春学期でしたが、教員として多くのことを学ぶことができました。今後、遠隔授業を行う状況になった際には、今学期の失敗と経験を振り返り、さらに充実した授業を行っていきたいと考えております。

遠隔授業の実践報告



人間健康学部 准教授
小室 弘毅

これまで、20人規模のクラスにおいて、4人程度の小グループに分かれてのディスカッションを行ってきました。Zoom においてもブレイクアウトルーム機能によってそれを実践していますが、クラスやグループをファシリテートするにあたって、リアルとは異なるいくつかの大きな問題が出てきました。それは、1つには各ブレイクアウトルームにファシリテーターである教員も個別には入ることができるのですが、全体を同時に見渡すことができないという問題です。もう1つは個別のブレイクアウトルームに入ると、教員が入ったということが学生の意識を奪ってしまうという問題です。教員がブレイクアウトルームに入るとその瞬間にそれまでの学生同士のコミュニケーションや、つくりあげられていた場は壊れてしまいます。リアルな場であれば、教員はグループに入らずに、遠くからグループの様子を眺め、把握することができます。それも同時に複数のグループの様子を把握することができ、その場にいながら学生たちの声や様子を聞くとともに聞き、見ると

もなく見、感じるともなく感じ、いるともなくいることができます。1つのことに焦点を当てるのではなく、全体に漠然と意識を配り、また自身の存在もいるのでもないのでもないあり方でそこにいるという、非常に曖昧な意識状態、曖昧な存在様式が、ファシリテーターとしては重要な技法だということに、今回あらためて気がつくことになりました。1つのことにフォーカスするのではなく、複数のものに同時に意識を向け、複数の回路で情報を受け取る。ファシリテーターとしての最も大切な技法がオンラインの授業では失われてしまうのです。

現在の音声技術では、小グループ内での誰かのちょっとしたつぶやきを拾ってくれることはなく、また複数の発言を同時に伝えてくれることもありません。これに関しては技術の進歩を待つしかありませんが、ブレイクアウトルームに教員がいるようにすることは物量作戦で解決できます。PC をブレイクアウトルーム分用意して、1台ずつブレイクアウトルームに割り当てるのです。そうすると、出入りすることなく教員は各ブレイクアウトルームにすることができ、学生たちは教員の存在を気にすることなくディスカッションに集中することができるようになります。さらに教員は複数のグループの様子を同時に把握することもできるようになります。苦肉の策ではありますが、現在はこのやり方で対応しています。



社会安全学部 教授
西村 弘

遠隔授業やむなしは理解できましたが、Zoom などまったく知らず、途方に暮れました。ただ、関大 LMS は以前から使っていたので、資料提供と小テストだけなら簡単でした。しかし、それでは通常授業の水準より大きく落ちます。思いついたのがラジオ講座もどきでした。授業資料をもとに日頃の授業とほぼ同様に話し、その録音を配付する、それなら家にある IC レコーダーだけでできる、と考えました。関大 LMS にアップできるかと授業支援に聞くと問題ないとのことで、方針が決まりました。授業ごとの録音時間の長短に困りましたが、何度か試行してどうにか80分に収めることができました。のちに、録音ソフトを使えば時間調整できるとわかりました。最後の10分は LMS での小テストを行い、90分の講義としました。

当初、講義時間どおりの授業形態を考えていましたが、関大 LMS へのアクセスに難があるとわかり、講義録音は2日前から授業開始時間までダウンロード可能にしました（授業資料はほぼ

1か月前から）。また、在宅勤務や受講をしている親兄弟がいる学生の場合、教室同様の措置が難しいこともわかりました。この点は Zoom 授業より良かったかもしれないと思いました。

小テストは入室時間制限（10分間）を設け、講義録音を聞かねばわからないパスワード設定を行いました。しかし、アクセスログを確かめると録音を聞かずに小テストを受験した学生がいました。その都度「お尋ねメール」をし、漏洩の事実確認と漏洩者を特定し、双方を厳しく叱責しました。評価に占める小テストの比重が高まる中での不正であり、軽く考えるわけにはいかないと考えた結果です。また、そうした「残念な事実」があったことは受講者に知らせ、小テストのあり方について意見を求めました。パスワードなど設定するから「漏洩」が生じてしまうのだから、いっそなくしてしまおうかとも考えましたが、多数意見は「残せ」でありました。その方が「まじめに受講している学生が報われる」ということでした。

私にとって初めての遠隔授業、不注意から受講生に迷惑をかけたこともありました。注意資源に限りがあるというヒューマンエラーですが、教員以上に学生の不安や不満があることを考えるなら、念には念を入れるべきでした。反省しきりの遠隔授業でしたが、これを懐かしく思える日はまだ先のだと思います。



環境都市工学部 准教授
豊田 政弘

私の専門は建築音響学と呼ばれるもので、建物内の音の響きなどを取り扱います。通常の対面授業でも同様ですが、音はコミュニケーションの核を担うひとつであり、そのクオリティがコミュニケーションの良し悪しに大きな影響を及ぼします。遠隔授業にあたって特に注意したのは、オンデマンドの動画配信であれ、リアルタイムのミーティングであれ、相手に聞き取りやすい音声を提供することです。一般的に広い部屋では響きが多く、マイクを通した音には口から直接届く直接音とともに残響と呼ばれる反射音が含まれやすくなります。反射音が大きいと、直接音と重なり、音声が聞き取りにくくなります。これを防ぐには直接音を大きくするか、反射音を小さくすれば良いということになります。前者のためにはマイクを口に近づけること（これをオンマイクと呼びます）が有効ですが、息がマイクに直接当たると雑音が入ってしまうため、近づけすぎないようにするか、風防を利用するなどの注意が必要です。一方、後者のためには部屋の吸音処理が有効です。吸音材と呼ばれる吸音専用の材料を使用することが望ましい

ですが、すぐには手に入りませんので、カーテンを閉めたり、毛布や衣類などを部屋に干した状態にしたりすることである程度代替ができます。こちらの場合は映像に生活感が溢れる可能性がありますので、バーチャル背景などを適宜利用することをお勧めします。もう一点、ハウリングという問題もあります。聴取のためにスピーカから出た音をマイクが拾ってしまい、同じ音がループすることで生じます。これを防ぐためにはマイクを使用する方全員がヘッドフォンやイヤフォンなどを使用する必要があります。大抵のミーティングソフトウェアにはハウリングキャンセラと呼ばれる、電気信号的にハウリングを除去するプログラムが組み込まれていますが、完璧ではありませんので、やはりヘッドフォンなどの使用をお勧めします。幸い、私は自宅に吸音処理を施した防音室を持っておりますので、そこで動画用音声の録音やリアルタイムミーティングなどを行っています。聴取にはイヤフォンを使いますが、マイクはノートPC内蔵のものを使用し、口と近づきすぎないようにしています。残響がほとんどない部屋ですので、オフマイクであっても十分クリアな音声を拾うことができます。教員も学生も遠隔授業に少しずつ慣れてきて、マイクやヘッドフォンには注意をされている方も多くなってきましたが、さらにもう一工夫として部屋の吸音にも気を配ってみてはいかがでしょうか？



化学生命工学部 教授
池田 勝彦

On Demand 講義について少しは考えていましたが、新型コロナウイルスの猛威のプレッシャーで実際に遠隔講義を On Demand で行うことになってしまいました。当初は「Zoom」って何?? から始まって、画像編集ソフトの選択・導入からその操作まで、バタバタの準備から実施となりました。

学生さんの状況から On Time の講義は難しいと考え、On Demand 講義を選択し、講義録画を「Zoom」で行いました。最初は単純に「Zoom」画像そのまま、対応できるのではと「安易」な考えで作成した録画画像を自ら視聴した結果、このままでは「学生さん」に見ていただくことは困難であると確信しました。そこで画像編集ソフトを導入し、授業本体の編集、具体的には無駄な画像などのカットや資料画像の追加などを行いました。さらに、タイトル画像も追加しました。そのような編集作業で最低限の講義画像の体裁は整えられたと考えました。あくまでも最低限の体裁で、学生さんにとって無味乾燥な動画でしかないの

ではと考え、学生さんの視聴を促すことができる何か「プラスα」的な要素があった方がよいのではと思い、「導入部」プラス「アイキャッチ」をタイトルと本講義の間に加えることを試みました。そのために、「音声合成ソフト」と「アニメーションソフト」を導入し、講義担当者のイラスト（図1）を用いて毎回の講義の「導入」を講義担当者にアニメーションで語ってもらうことを加えました。この導入が講義の視聴の積極性を高めているかどうかは現状調査できていません。かえって「ふざけている」と思われているかもしれません。今は「音声合成ソフト」の大阪弁バージョンを導入し、大阪弁で講義担当者のイラストがしゃべっています。

音声合成ソフトを導入した理由ではありますが、講義担当者の「活舌」に難ありであったことと、非常勤講師をお願いしている先生方から「資料」と「講義テキスト」をお送りいただいたので、それを動画化するためです。

今後は、これまでの経験を活かして出張等でも休講せずに、講義動画で On Demand 講義により対応できればと考えています。



図1 講義担当者イラスト

遠隔授業の実践報告



春学期の経験を活かした オンライン授業の 継続拡大について

教育推進部 教授

山本 敏幸

関西大学での授業のオンライン化の取り組みは、あくまでもコロナ対策の一連の取り組みであり、災害時や非常時の取り組みに他なりません。これまでの平常時に研究と開発を重ねてきた通信教育、遠隔教育、eLearning等の体制は、今回のような緊急時には教員のオンライン授業化に対する心の準備とICTツールの操作の不安が残り、あまり効力を発揮できませんでした。事実、インストラクショナルデザインに従って一つのコースをeLearning教材コンテンツとして、関大LMSのコースを準備するには、インストラクショナルデザイナー、ウェブデザイナー、プログラマー、コース担当者（コンテンツ提供者）がチームで6～9ヶ月の時間を要します。このようなやり方では緊急時には間に合いません。さらに、これまでの遠隔教育は平常時に時間的距離・地理的な距離を克服するために学習者に平等に学ぶ機会や教育の質保証を担保するものでした。コロナ対策としての授業のオンライン化

の決断は、大学側の授業運営についての緊急事態下の判断で、この時点では、コロナ終息までに時間がかからないであろうという期待と、学内の既存のIT資源とインフラを活用すれば平常時の教室での授業運営にしか慣れていない、ICTを十分に活用していない教職員でも乗り切れるという考えからであったからだと推測されます。

今回のコロナ対策では、クラウドサービス（Zoom、MS Teams等）、関大LMS等の既に学内で稼働しているICT環境を折衷案的に活用して、春学期の授業をおこなってきました。平常時の教育体制でルーチン化した授業運営手順、教務手順、業務手順、及び、それに基づいたITインフラが、非常時には十分に機能しないことが見えてきました。私がアメリカ留学で学んできた教育工学の学問領域が通用しない時代が到来しました。言い換えると、これからはニューノーマルでの教育のあり方全体をイノベーションすることが課題となってきます。これは、高等教育の大事なミッションが教育を通じた未来社会に向けての人財育成と涵養である以上、欠かせない観点だと思います。今回のオンライン授業の仕組み作りの経験を通して、様々なことが教訓となりました。これからのCTLの必須プロジェクトとして取り組んでいきたいと考えております。



オンラインでの 授業設計を考える

教育推進部 准教授

岩崎 千晶

関西大学は日常的にオンラインで授業をしている大学ではありませんが、4月20日より全学的なオンライン授業になりました。急な決定に戸惑いや不安を感じた先生方や学生もおられるだろうと思い、教育開発支援センターではFDや学習支援において、今あるものをオンラインでも活用できるような取り組みを迅速に進めてまいりました。具体的には日常的なFD活動やライティングラボのチュータリングをオンラインで実施してまいりました。FD活動は4月1日を皮切りに30回近く実施しております。

その中で私が最初に作成したのが授業設計に関するスライドでした。オンライン授業をするにはまず授業を再設計する必要があると考えたからです。授業設計には授業目標、教育内容・教育方法、評価方法の3要素が含まれます。オンライン授業になっても授業目標が大きく変わることはありませんが、教育方法や評価方法は変更される可能性が高いと考え、新たな授業設計をする際に使っていただける資料を作成しようと考えました。先生はご覧いただけましたでしょうか？授業設計の基本は対面でも、オンラインでも変わりません。秋学期以降の授業を設計される際にもご活用いただけると幸いです。

①授業目標の確認

授業目標を確認し、何を達成したいのかを明らかにしましょう。例えば、初年次教育科目の場合、「レポートと感想文の違いについて説明できる」「レポートの基本的な構成について説明できる」などが挙げられます。

②教育方法の設定

授業目標を達成するための教育方法（リアルタイムで授業を受ける、講義映像を視聴する、eラーニングを受ける、教科書を読む、課題プリントを解く、ショートレポートを書く、小テストなど）を選択しましょう。授業目標はいくつかの項目に分かれていることが多いと思います。各目標を達成するにはどの方法が望ましいのかを確認しましょう。

例えば、初年次教育科目の場合、【eラーニング】「ライティング力を高めて、いいレポート・卒論を書こう!」の「ライティングの第一歩!」を受講し、【レポート課題】として「所属学部のディプロマポリシーで提示されている力を培うために、大学生活で努力したいこととその理由についてA4 1枚以内で述べよ」といったレポート課題に取り組む等が考えられます。

③評価方法の設定

授業目標が達成できたのかを判断する方法を選択しましょう。小テストの結果、eラーニングの学習履歴、チャットや掲示板での発言、レポート、ノートテイキングの内容を提出など、様々な方法があります。授業の目標が達成されたのかを判断するには、どの成果物を用いることが望ましいのかを確認しましょう!



遠隔授業で(も)グループワーク

教育推進部 教授
三浦 真琴

◆関大LMSなのにグループワーク

Zoom の導入がなかなか決まらなかったため、当初は関大 LMS を用いる授業設計をせざるを得ませんでした。その場合、授業をオンデマンド型にするのが自然な発想でした。しかしながらこれまで複数の科目で展開してきたグループワークを断念することはできませんでした。そこで学生が時間割通りに授業に参加することを前提として、都度、タイムラインで指示を出しながらコンテンツを授業の進行に合わせて提供することにしました。さらに互いに顔を見ることも声を聞くこともできない状態でグループワークを展開するためにグループ別にメンバー専用のチャットルームを開設し、そこで情報や意見の交換・共有ができるようにしました。つまりチャットルームを共同作業場としました(但し、通常おこなっているグループワークの予行演習(GWT:Group Work Training)は断念せざるを得ませんでした)。断片化された情報を持ち寄って全体像を明らかにしながら課題を解決するワークの際には、各グループの特定のメンバーしか入室できない情報チャットルームを複数室作成しました。例えば全体で16種類の情報がある場合、4人編成のグループでは一人当たり4種類の情報をそれぞれが手にすることになりますが、入手する情報の重複を避けるために、メンバーのそれぞれが特定の4種類の情報を見ることのできるチャットルームを個別に4室設けました。Zoom が導入されるまでは、この形でグループワークを展開しましたが、学生によるタイムラインへの記入を可能にすることで、不明な点についての説明などをオンタイムで行うことができました。

◆Google slide/documentあればこそそのグループワーク

Zoom の包括的契約が決まり、いよいよ授業に導入することに

なりましたが、そこでは関大 LMS のグループ別チャットルームを上回る共同作業場を設定することができました。ブレイクアウトセッション機能を使えば、各ルームにグループを割り当てることができるため、それだけでグループワークが出来るように思い込みがちでしたが、それは対面授業時にグループ別に着席させたことと同じでしかないと考えました。グループワークを速やかに展開するためには数回に亘る予行演習的なスモールワークを経て、グループワークに必要なことを体験しておく必要があると考えます。今期はこの GWT を経ることなくグループワークが既に始まっていましたが、Zoom 導入を折角のチャンスと捉え、二度ほど GWT を試みることにしました。最初はうそつき自己紹介でした。話者は自分の名前にまつわるエピソードを三話用意しますが、そのうちの一つは作り話とします。エピソード三話を聞いた他のメンバーが、どれが作り話であるかを探り当ててののです。話者は見抜かれなければならない作り話を瞬時にこしらえなければならないので、心地よい緊張感が漂います。またグループワークに欠かせない傾聴の体験ともなりました。二度目の GWT は Google 双六でした。双六盤のマス目には会話のきっかけとなる事柄を書き込んであり、その質問に答えただけで次の人に順番がすぐに移移動することはないように設計してあります。ほとんどのグループが時間内に GOAL までたどり着けませんでした。それは会話が盛り上がったことを意味します。会話が盛り上がったのは双六の出来が良かったからというよりは、共同で作業する場(Google slide)が存在したからであると考えました。以後は、グループワークの課題を Google slide もしくは Google document で作成し、グループ別に URL を配付することにしました。メンバーの中には通信量制限がかかる月末(もしくは月始)に限って Zoom ミーティングに参加できないものもありましたが、グループ別の Google slide/document の URL を関大 LMS のタイムラインに貼り付けてあるので、ワークの内容や進捗の共有が可能となりました。このように Google slide/document を共同作業場として設定することで、オンラインでのグループワークは比較的スムーズに展開できるようになりました。



ライティングラボ
アカデミック・アドバイザー
藤田 里実

従来、クイズを授業中に出しても、学生の「答え」と「それを選んだ理由」を即時的に把握することは難しかったです。大規模授業は更なり、と思います。とはいえこれらを把握できれば、

より学生の理解傾向に沿った説明方法をその授業中に選択できるとも思いました。

その意味で、Zoom 機能の「投票」と「チャット」は有効でした。「投票」でクイズを行い、学生全体の理解傾向を把握し、回答選択理由は「チャット」で出してもらいます。正解を選択していても理由付けで誤解があれば、その点を解説できます。回答や理由のバリエーションを学生間でも共有できます。従来型とは異なる「積極的な授業参加」の形が見えてくる思いがしました。

遠隔授業の実践報告

「図書館サービス概論」での
ブレイクアウトルーム効果

私の授業では、「ビブリオバトル」「図書館観察レポート」という二つのグループワーク形式授業を行うため、Zoomのブレイクアウトルーム（以下BR）を使うことが必須でした。そこで役立ったのは、なんといってもFD説明会でBRを体験させてもらったことでした。メインルームからBRへ移行するドキドキ感、そこで初対面の人と会うことになります。意外に話しやすく、これはイケる、と思いました。当日80人の学生が一瞬のうちにBRへ消えていくのは、圧巻でした。対面のように席割りに苦労することもないし、学生たちもより広い範囲の人と出会う機会があります。「入学して初めて同期の人と話した」「画面越しだと、対面より緊張せずできたので、やりやすかった」な

どの声もあり、上首尾に終わりました。

しかし、BRの威力を発揮するのは、そのあと「図書館サービスとコミュニケーション」の授業で、部分的にBRを取り入れた時でした。

授業の雰囲気を一気に変え、学生たちも気軽に話し合えたようでした。「クレームをつけた経験を話し合う」「望ましい言葉遣いに直す（問題形式）」という生活に即した話題だったせいもありますが、楽しいひと時だったことがミニッツからうかがえます。ミニッツを書く時間がたっぷりある、というのもZoom授業の思わぬ効果でした。「会話するといってもアルバイト先くらいで、オンライン授業も基本先生が話しているのを聞くものなので、BRで同年代の人と話す少し気分が明るくなり、すごく楽しいです」という声をいただきました。

Zoom授業は、初めてのことばかりで、CTLの方には、大変お世話になりました。切羽詰まった深夜のメールにすぐ返事が返ってきたときは、ほんとにうれしかったです。ありがとうございました。

（非常勤講師 小前 恭則）

アナログ人間のZoomへの挑戦

「オンラインで授業を行うことがあります」から「インターネットを活用した遠隔授業を行います」と表現が変わり、遠隔授業が刻一刻と身近に迫ってきました。

Zoomのアカウント取得から始まり、使い方などまったく分からず、授業支援グループの職員の方に懇切丁寧に教えていただき、何とか最低限のことはできるようになりました。

Zoomを使う利点は、ドイツ語の発音など文字だけを通しては伝

えられないことが伝えられる、またクラスの雰囲気を感じ取ることができる、ということです。

日々の実践に関しては、わたしが何か工夫をしたというよりも、学生たちの真剣に学ぼうとする姿勢に常に励まされ続けた、というのが正直な感想です。

対面授業になったとき、学力に不十分なところがないようにと、前期残りの間、教員として励んでいきたいと思っています。

（非常勤講師 中村 恵）

遠隔授業の苦労話や工夫

自宅で授業をすることで生じるハプニングは、みなさんも経験されていると思います。突然鳴る電話、宅配便のチャイム、家族が電子レンジを使った瞬間Zoomの電波が途切れてしまうなど、Zoomの中の世界で進む授業を、完全に外の世界から遮断できないことに

は苦労します。せめて雑音を遮ろうと、学生の発言の間はミュートにしているのですが、うっかりそのままコメントして、口パク画像が笑いを誘うという失敗も度々です。

（法学部 教授 大津留（北川）智恵子）

遠隔授業を実施するために学内の有志でZoomを使って勉強会を行いました。4月下旬の時点では、録画をする方法あるいは課題の提示やレポートの授受の方法といった技術的な課題が多かったため、技術に長けた教員がZoomやLMSのデモンストレーションを行ってスキルの共有を行いました。また、外出自粛を続ける学生のストレスに対してどのようにフォローをすべきかと言った議論も行い、ベ

テランの教員による経験などもうかがいました。5月以降は、遠隔授業開始後の経験を踏まえてノウハウの共有や意見交換を行いました。他学部あるいは学部内でも他専攻の教員間で積極的に講義に関して議論をする機会はこれまであまりなかったもので、貴重な学びの場となりました。

（商学部 教授 木村 麻子）

2019年度の組合委員として各学部の対応を集約する過程でslackを活用しました。「#教材開発」「#遠隔授業」などのテーマごとにコミュニケーションと情報蓄積（他大学の運用例や授業の実践例など）ができました。Zoomでネットワーク環境が脆弱な学生が自分の顔を出す処理が落ちる、独りZoomでPPTを画面共有して録画すると（PPTに録音するよりも）データが圧縮されて重くならず、

関大LMSやDropboxに上げやすいし、受講生の側も、オンデマンドで何度も視聴できるので、重宝する等の技術的情報もここで得られました。遠隔授業の記録は必要ですが、速報性を意識したこうした対応も一考に値すると思います。

（政策創造学部 教授 安武 真隆）

事務職員からの報告

Wi-Fiルーターおよびノートパソコンの貸し出しについて

遠隔授業の受講にあたっては、各自で必要な受講環境を整えておくようお願いしておりましたが、どうしても環境が整わない学生に対して、大学では、貸出用に Wi-Fi ルーター 300 台（利用料金の大学負担6割、学生個人負担月額2,000円、月間データ容量20GB）およびノートパソコン200台（学生個人負担なし）を当初準備しました。

授業支援ステーションでは、インフォメーションシステムの「申請・アンケート」で学生からの利用申込を受け付けました。Wi-Fi ルーターは、関西大学生協同組合の協力を得て、全学の学生約100名に貸し出しました。ノートパソコンは、授業支援ステーションやコラボレーションコモンズの学生貸出機に加えて、IT センターおよび社会学部等からも提供を受け、全学の学生約260名に貸し出しました。

（学事局 授業支援グループ 芝田 豊寿）

「関大コンビニプリント」について

自宅にプリンターがなく、遠隔授業の受講やレポート作成等に支障が生じている学生に対して、大学では、日本国内の主要コンビニエンスストア（ローソン、ファミリーマート、セブンイレブン）で遠隔授業にかかわる講義資料等を印刷で

きる「関大コンビニプリント」のサービス（学生個人負担なし、モノクロ・A4・300枚まで）を準備しました。授業支援ステーションでは、Microsoft Forms で学生からの利用申込を受け付け、関大パンセの協力を得て、全学の学生約3,600名にサービスを提供しました。

（学事局 授業支援グループ 木元 隆文）

関大LMSの利用支援について

遠隔授業の実施に伴い、はじめて関大 LMS を利用する教員および新入生を中心に、操作方法等の問い合わせがメールリストに多く寄せられました。問い合わせの多い時期には、1日200件を超えるメールが寄せられ、授業

支援ステーション職員、IT センター職員およびシステム開発業者の三者が連携して回答にあたりました。

今回多く寄せられた問い合わせとその回答内容を Q&A 集としてまとめ、利用者にとって分かりやすいマニュアルの充実を図ります。

（学事局 授業支援グループ 榊原 和弘）

教員・学生からの質問対応について

4月初旬、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い今後の授業がどうなるかとの問合せが教育開発支援センターに届くようになりました。日に数件から多い時で数十件となり教員・学生になるべく早く回答することを心掛けました。時には、23時過ぎや日曜祝日にリアルタイムで回答を行うこともあ

りました。質問が多い内容については、マニュアルや動画コンテンツを作成するなどして、質問件数を減らす努力もしました。そのような努力の結果、教育開発支援センターのホームページには60を超えるマニュアル・コンテンツを掲載しております。

（学事局 授業支援グループ 岡本 芳知）

「関大LMS」について

遠隔授業開始とともに関大 LMS に予想以上のアクセスが集中したため、負荷対策を実施し、その後は安定運用を続けています。

問い合わせ数は2016年の運用開始以降、最も多く、限られた人員での

対応にも限界があり、利用者への回答が常に1～数日遅れとなるなど大変な時期もありました。

過去の問い合わせ内容を分析し、QA 集に公開して、関係者間で回答の共有を行ったことがその後の対応時間の短縮に寄与できたと考えます。

（学術情報事務局 情報推進グループ 長畑 俊郎）

「Dropbox」について

学生が利用する機器（スマートフォンやパソコン）において、OS が様々で統一性がなく、同じ質問でも一つ一つに異なる対応が必要となりました。また、問い合わせ数を減らす工夫として、各サービスの利用方法など、教

員・学生向けに分けたマニュアルを掲載した遠隔授業特設ホームページの開設は必須であり、公開が遅くなったことや多言語対応が取れていないことが課題と感じました。

（学術情報事務局 情報推進グループ 村田 直也）

「Zoom」について

遠隔授業開始に伴い、緊急で Zoom を導入することとなり、短い準備期間ゆえ常に新しい問題に直面し、解決しながらの運用開始となりました。Zoom 社で発生する不具合を IT センターでカバーすることや、ソフトウェ

アの機能を隅々まで正しく把握しなければならないことは、非常に困難で、時間を要する業務でした。しかし現在は多くの授業で利用されているうえ、トラブルも格段に減少しており、これまでの努力が報われる思いです。

（学術情報事務局 情報推進グループ 青木 靖太）

学生からの意見や感想

苦労した所は僕の家の Wi-Fi が弱すぎてゼミの間や授業中に強制退出をさせられたところです。あと自分の部屋に撮影に適した場所がなかったので、Zoom の間は私生活感丸出しでした。自分があんまりそういうところを気にしない性格で良かったと思います。良かった所はオンデマン

ドの授業を自分の好きなタイミングで見られるから融通が効くところと、移動時間がなくなったおかげでその空いた時間にやりたいことができるようになったことです。肌感としては良い所40%、悪い所60%で、やっぱり対面授業の方が好きかなと思いました。

（社会学部 3年生）

就職活動と授業の両立は、web 授業だったからこそ毎度出席することが出来たと思います。対面授業だと移動時間等があり、授業に参加できない日も多かったと思います。授業ではミュート等が利用できたので苦労し

たことはありませんが、就職活動の web 面接ではとても苦労しました。私は実家暮らしである為、家族の生活音、顔の写り、回線が不安定等、問題があり苦労しました。

（社会学部 4年生）

就職活動と並行しながらゼミに参加しやすかったのも、私はオンライン授業でよかったと思っています。ただ曜日感覚がなくなってし

まいがちだったので、忘れないように携帯のスケジュールにアラーム機能をつけるようにしていました。

（社会学部 4年生）

学生からの意見や感想

みなさん、Bonjour! オンライン授業に対する LA 視点での印象を記してまいります。印象として、「①授業の参加率が高い」、「②受講生の顔が見えない状態であると、接し方が難しい」ことが挙げられます。以下に①、②の詳細を記します。

①についてです。私は現在、二つの授業に LA として参加しております。一方はクリティカルシンキングの授業、もう一方はプロジェクト学習の授業です。いずれも受講生の人数は20数名です。クリティカルシンキングの授業では、ほとんどの回が全員参加であり、プロジェクト学習の授業においても毎回20名くらいの受講生が参加されています。これまでも20数名ほどの授業に LA として参加することがございましたが、毎回の授業で20名以上となることは少なかったように思います。このことを踏まえて、参加率が高いという印象を持ちました。参加率が高い理由として、移動時間がないことが挙げられると思います。対面の授業では、大学への移動時間などが必要となります。しかし、オンライン授業

では極端に言えばボタン一つで参加することができます。移動時間がなく手軽に参加可能な点が、参加率を高めているかと思います。

次に②についてです。オンライン授業において、インターネット環境によってはビデオをオンにすることが難しい受講生もいらっしゃるので、顔が見えない状態で話をすることもございます。これが難しいのです。当初、難しく感じる原因を、「顔が見えない状態の受講生は発言が少ないため」だと考えておりました。しかし、模索する中で、その考えが決めつけであったと分かりました。難しさの原因は私の過度な干渉にあったのです。過度な干渉が受講生の発言を抑制してしまいました。現在は過度な干渉にならないように気をつけております。

以上がオンライン授業に対する印象となります。今後も楽しみながら支援の仕方を模索していきたいなあと考えております！

(文学部 4年生)

オンラインの講義はこのような状況では仕方なく、関西大学は関大 LMS を使って上手く対処してくれたと思います。最初は戸惑うこともありましたが今では大きな問題を抱えることはありません。グループワーク以外の授業は評価の方法がレポートぐらいしか残っていないのでレポートが増えることも仕方がないと思っています。ただ、そのレポートを書くための資料の質が対面の授業に比べ低いのは今後の課題となるのではないのでしょうか。まだ音声付レジュメを出していただければ良いのですが資料を出すのみでレポート提出を求める授業もあります。それではインターネットのサイトで済むのでは(わざわざ授業料を払う必要がない)と思ってしまうこともあります。確かに、サイトと資料では信憑性が違うのかもしれませんが、サイトと差別化できていないことは課題でしょう。差別化するために、音声をつけて補足説明を足したり、最近の事例を出したりするべきではないのでしょうか。またフィードバックを用意できればそれが一番の差別化になるので

はないでしょうか。フィードバックをしないことが今までの大学の流れであるのかもしれませんが、そうであるからこそ、そこを変えることが大学の強みにもなりえるのではないのでしょうか。例えば、小テストならその小テストの解説を出す、また正答率がわかるようにして、低い問題のみ解説するだけでもいいと思います。レポートなら感想やレポートの総評を書くなり載せるなりする。もちろん、感想をすべて書くことは不可能なのでいいと思ったレポートの良かった点を用いて、次の授業の冒頭の復習に使う。少し中身が違うレポートが多かったらその点をあげ自分の教材のわかりにくかった点を改善して説明しなおすなど、さらに改善できることはあるはずです。とにかく、最後に大きなレポートを用意してそれを100% 評価にするだけの授業では大学にお金を払って受けた授業にはなりません。

(商学部 2年生)

「ピアサポートのためのクリティカルシンキング」をオンラインで受講し、この授業ではオンライン上でできることを最大限に活かした内容を提供してくださったと感じます。先生は Zoom や Google Document など、オンタイムの会話や同時に一つの材料を皆で扱えるものを使うことによって、離れていながらも他の学生と共同作業ができ、できる限り対面授業で得られる時間と近いものを提供してくださいました。カードを一枚ずつ他人に見られないように引くという場合でも、それをオンラインでできるように工夫し制作してくださったことには「オンラインでもここまでで

きるのか」と驚きました。最初は、この授業は対面で受けるべきだと思っていましたが、進んでいくにつれて、毎週画面越しにグループのメンバーと共同で何かを解決したりすることが楽しくなっていき、今ではオンラインでの授業に満足しています。そして、このような結果となった要因としては、先生の工夫が一番にあげられると思います。受講生の意見を聞きながら、対面授業と近いものを提供できるように工夫してくださった先生に感謝しています。

(文学部 3年生)

関西大学では4月20日からオンライン授業となりました。この授業スタイルがいつ対面に戻るかは未定ではありますが、春学期は原則オンライン授業とのことです。オンライン生活が始まり、2か月がたった現在、この授業スタイルに関する意見をいくつか述べたいと思います。

とはいえ、開始当初はオンラインで授業を受けるなど初めてのことであったため、各授業で配付される授業資料をダウンロードし、読むことだけで精一杯でした。しかし、2週間ほどたつと、この生活スタイルに慣れてきました。1か月がたったころには難なく課題等をこなすことができるようになっていました。オンライン生活に私自身が同化したといえるでしょう。

オンライン授業の良いところは、自分の好きなタイミングで授業を受けることができるという点です。加えて、板書に関しても音声資料等でうまく聞き取れなかった場合や、今の話をもう少し聞きたい、というときには何回でも巻き戻しをして確認することができます。対面では一回きりしか聞けなかった講義が、何度も聞くことができ、より深い学びにつながるという点ではオンライン

ン授業も悪くない、といった印象です。

しかし、良い点ばかりではありません。出される課題の量が莫大であるというのは一つの例です。従来あった出席等の平常点がなくなったため、成績評価にはどの授業でもほぼ毎回課題、テストが出されます。私も実際、課題に追われる日々を過ごしています。しかし、課題は授業での学びを生かすアウトプットツールとしては素晴らしいものです。得た知識を活かし課題を行うことで学びにつながると私は考えていますが、あまりの量に課題をアウトプットツールではなく作業としてとらえてしまうことがあります。

オンライン授業を受けて感じたのは、対面授業が始まった際も、オンライン上でできるものは積極的に行うことでより良い学びを得ることができるのではないだろうか、ということです。対面授業とオンライン授業での良いところを融合させることにより、大学での学びがよりよい物になると私は考えます。

(商学部 2年生)

オンライン授業では、Zoomの授業、教材が関大LMSに提示されてレポートを書く授業、講義動画を見てテストをする授業などさまざまな形式があり、はじめは混乱しましたが、ホワイトボードに時間割とレポートの期限を書くようにすることで解決できました。困ったことは、レポート課題をする際に質問があり、シラバスで「質問はLMSのメッセージで。」とあったので、関大LMSのメッセージで先生に連絡したのですが、1ヶ月以上返信がもらえていないことです。その授業のレポート課題は、メッセージに添付して送る形式で、私だけかもしれませんが、どうも添付してから宛先を選びメッセージを打つと添付が消えてしまうようで、気づかず課題を添付できていないまま、「課題を添付しました。よろしくをお願いします。」というメッセージだけを何度か送ってしまっていました。完全に私の不注意であり、先生がお忙しいことは重々承知していますが、「添付が見つかりません。」などと言ってもらえたらありがたかったです。締め切りは過ぎていました

が、とりあえず気づいたときにすぐ提示し直しました。また、添付できていないメッセージを送って気づいていない学生が私の他にもいるかもしれませんので、他の不具合もありましたらそれと合わせて学生に周知してもらえたら助かります。

Zoomは、30人規模で先生が学生1人ずつに話題を振ってくださったりする授業があり、みんなの近況などを知ることができてとても楽しいです。このようにある程度他の学生のことも知った上で、Zoomの機能であるブレイクアウトルームを使って3～4人程度のグループで話すのも貴重なコミュニケーションの機会になっています。

授業形式それぞれにメリット、デメリットがありますが、先生方も慣れないオンライン授業かとは思いますが、工夫して行ってくださっていることに感謝します。

(文学部 1年生)

オンライン授業を行うのも受けるのも初めてだったので、初めはコミュニケーション面や授業も進め方などがうまくいくか不安でした。顔を見ずに、会ったことがない人と話すことは受講生もLAも少し難しいと感じました。授業を進める側は、受講生からの反応があまり分からなく、少し不安でした。ネット環境や様々な事情によって顔出しができない受講生もいましたが、途中からは顔出ししてくれる受講生がいたり、受講生同士が仲良くなったりで、だんだんとコミュニケーションを取れるようになって良かったです。グループワークをする際、通常授業ならLAは、全体を

見ながら歩き回りサポートをすることができましたが、Zoomでは、全体を見ながら行うことができず、困っているグループにその時サポートにいけなかったことがあるかもしれません。Zoomでできることは限られているので、私たちがひとつのグループに長時間滞在せずに、もっと多くのグループをまわるようにしないといけないと感じました。しかし、全体的に見るとオンライン授業は、思っていたよりうまくいっていたと思います。

(文学部 3年生)

学生からの意見や感想

今年は異例の事態により、オンラインという形で大学に行くことなく今日まで授業を受けてきましたが、春学期も後半に入り随分と慣れたように思います。私は普段片道1時間半ほどかけて関西大学に通っていたため、内心、通学時間がかからない点においては非常に助かっています。また、課題の提出や小テスト・試験も全てネット上で行えるため、そういった部分での利便性はとても高いと感じています。

しかし、授業資料などを毎回印刷すると1週間でも相当な量で、一人暮らしをしている学生や奨学金を利用している学生の中には通常のようにレジュメを手にするのを諦めてしまう人も少なくないのではないかと思います。また、Zoomなどを利用し顔を見ながら・声を聞きながら授業を行ったとしても対面で可能なことがそのまま100%できるわけではないため、「やりづらさ」を感じる

ことが少なくないのが正直なところです。

私は上位年次で授業数も限られています。しかしながら、夢と希望を胸にこの春関西大学に入学されたばかりの1回生の学生は、大学という慣れない環境に加え、科目数も多いなか、このような状況を乗り切るのに相当苦労されたのではないのでしょうか。本当にお疲れ様です。

幸いなことに順調に終息に向かいつつあるコロナですが、今後は対面でまた楽しく有意義な学びを得られる日を1日も早く実現するとともに、スムーズに済ませられることには上手にオンラインを活用していけたら学生生活もより良いものになるのではないかと感じています。

(文学部 4年生)

オンライン授業は新型コロナウイルス感染防止のための異例の措置であり、大学側、学生側共に不慣れな仕組みを用いざるを得なかったのは仕方がないことだと言えるでしょう。そのうえで新入生である私が上位学年の先輩から聞いたのは、「オンライン授業になってから課題の量が増加しているように感じる」ということでした。私たちは平常時の課題の量を知りませんが、授業開始直後は確かに生活の大部分を課題に充てていました。

平常の授業が行われないことにより毎週の授業準備に多大な労力をかけてくださっているうえ、試験の中止も決まったとあっては、授業を受け持つ先生方の苦労は計り知れません。ただ、初めての大学生活で右も左もわからぬまま与えられた課題を必死

でこなす新入生がもしも声を上げたときは、どうか耳を傾けてほしいと思っています。オンライン授業は、やろうと思えばいくらでも手を抜けます。私たちは毎週、色々な先生から、色々な資料、授業動画、遠隔授業の知らせが届きます。全ての授業に確実に出席することにさえ注意を払わなければなりません。それでも先生方が用意してくださった学びの機会を取りこぼすまいと努力しています。先生たちの苦労を知らないからこそ、簡単に授業方式への批判をしてしまうかもしれません。オンラインだからこそ、大学と学生のコミュニケーションはより取りやすく、深いものでなければならぬと考えています。

(文学部 1年生)

今学期のオンライン授業は、自分自身の学習に対する意識が問われていると感じました。私は一回生であるため、本来の大学での講義については正直なところ、今もまだわかりません。そのため、以前との比較はできませんが、今学期の講義を通して自分の学習への意識が低かったと痛感しました。

まず、教授または講師の先生方が用意してくださった講義資料、動画などのおかげで、学べていることに対して、深く感謝しています。他大学に比べても、早い段階からオンライン授業を受けることができ、恵まれた環境であったと思います。しかし、私自身は課題をこなすことを重視するあまり、自分の真の理解へとつながっていないのではないかと、という点に不安があります。ま

た、やはり同じ講義を受ける学生と、同じ空間で、同じ時間に、刺激を受けあって学ぶことでより深い学びになっていくのではないかと思います。このように感じたのは、私の中に「学習は一人ではできない」という考えがあったからだと思います。学習に対する意識が低かったと反省しています。同時に、「与えられた環境や課題の中で、いかに自分で学習することができるか」を改めて問われた期間だと思いました。

秋学期からは、大学へ行き、対面授業ができること、仲間と共に学べることを期待しています。

(文学部 1年生)

リアルタイムの講義は時間内に終わる事が多いのですが、オンデマンド型の講義では1時間45分ほどのものが多くあります。課題や講義外動画が多いです。診断結果が眼精疲労からくる頭痛として救急で病院に搬送されたこともあります。レポートの書き方などを相談できる人、友達もいないため、一回生のはじめでこの状況はつらいなと思っています。現在は睡眠時間を削ることに慣れてきました。一日中パソコンの前から離れない限り、対面

授業と同じ時間に学習を終えることは不可能だと思います。

7月に一日(一限)だけ対面授業があります。その講義は2限目なのですが、1限と3限も大学で受けざるを得ません。

電車に乗って大学に行くことへの不安もあったのでオンライン授業に反対というわけではありませんが、もう少し、サポートをしてもらえたらいいのになと思います。

(政策創造学部 1年生)

オンライン授業が始まってから約2か月、学生・先生・LA それぞれが試行錯誤しながら、初めての状況に適応しています。正直4月時点では、オンライン上で授業やグループワークができるのか不安しかありませんでした。しかし、Zoom・関大 LMS・グーグルドキュメント等の様々なツールや関係者全員がこの状況におけるベストを尽く

したおかげで、対面授業に近い形で授業運営ができたと考えています。秋学期以降、対面授業に移行できるかはまだ不透明ですが、コロナ禍での経験が対面授業に新しい風（関大 LMS の継続的な活用や授業運営方法の変更など）を吹き込むのではないのでしょうか。

（経済学部 4年生）

オンラインではないときの授業がどういうものかわかりませんが、オンライン授業で良かったなと思ったのが、先生がまとめてくださる「教職概説の広場」で様々な人の様々な考えや意見を知ることができる点です。対面授業で意見交換をすることも良い刺激になったかもしれませんが、文字で書かれているものを見ることでより客観的に、そしてシンプルに他の人の意見を吸収できたような気がします。私は物事に対して視野が狭くなることがあり

ましたが、教職概説の広場を読んで他の人の考えを知ること、同じ課題や題材に対して今までとは異なる見方をすることができ、また授業の回数を重ねるごとに視野を広げて課題に向き合えるようになってきたように感じます。教職や教育についてだけでなく、考えることや多くの視点から物事を見ることについても学ぶことができました。

（文学部 1年生）

今回、このような事態になり、オンライン授業という形で大学生活が始まりましたが、同じ授業を受けている人と話すことができない、先生の話を生で聞くことができないという状況は正直、残念であり、また、大学生になった実感が全くわかりません。私は心理学などの授業を専攻していますが、実験が行えず、いまいち「心のはたらき」というものを想像できません。

確かに好きな時間に好きな速さで授業を受けることができるという点では、いいかもしれませんが、やはり、様々な考えを持っている人と意見交換することで話が発展すると思うし、自分にはない意見を聞くことで本当の「学び」というものができるのではないかと思います。

（文学部 1年生）

もしもオンライン授業がなければ、学生が学習する機会は少なくなっていたと思うので、オンライン授業があって良かったと思います。オンライン授業の良い点は、講義動画を自分で視聴する授業などでは、自分が理解できなかった部分やもう一度聞きたい部分を自由に遡れるところです。それでもわからない場合、メール機能や掲示板などを使って、先生に質問できるので、安心で

す。悪い点は、自宅のインターネットの接続が不安定なときがあるので Zoom などを利用するリアルタイムの授業が不安なことです。また、パソコンの利用に不慣れなので、最初は Word で書いたレポートの提出方法がわからなくて苦労したので、必要最低限のやり方だけでも大学側からアナウンスしてほしいです。

（社会学部 1年生）

オンライン授業は自宅で、パソコンまたは他の機器の前に座るだけで授業を受けることが出来るので、長い通学時間を経て学校に行かなければならない人にとっては、時間を多く使えることになって良いと思います。しかし、オンライン授業ならではの不安もあります。私の場合はネットワーク環境のことです。私の家には Wi-Fi があるのですが、日によっては接続が不安定となるこ

とがあります。リアルタイム授業で先生が重要な話をしていられる時に接続が切れて、困ったこともあります。今後、もし読み上げ型のテストや発言を個別に求められたときに通信が切れることがあったらとゾッとします。こればかりは誰が悪いわけでもない、改善できなくて困っているのが現状です。

（文学部 1年生）

オンライン授業になり、対面ではないので相手とコミュニケーションが上手く取れないということがありました。ほとんどの授業で顔を出さないで、相手の表情を確認することが出来ないため、いかに自分の言葉でうまく伝えるか、相手に理解してもらうかが非常に大切になると感じました。しかし、そういったデメ

リットもありますが、逆の言い方をすれば、話し手は相手に伝える力（話す力）、聞き手は聞く力を養うことが出来るので、その点においてはオンライン授業もある意味効果的だと思いました。

（商学部 1年生）

私はズーム授業には参加できていませんが、資料が分かりやすく毎回の授業を理解できているよう実感します。どんな環境下でも十分に授業を受けられるようになっており、すごく有難いです。また、毎回レポートでは自分が親や教師のような教える立場

に立った時、どのような対応をするかという問いがあるため、教師としての振る舞いを実践的に考えられるすごくいい経験になると感じています。

（社会学部 1年生）

学生からの意見や感想

遠隔授業に関しては、ゼミ以外の授業を受講していなかったことで、特に不便はありませんでした。就職活動を授業の両立で意識していたことは、予定が被らないように日時の調節に注力したことです。Zoom や skype を用いた説明会や面接が殆どだったので、対面よりも日付感覚が無くなってしまっていたので、予定が決まり次第、すぐに手帳に書きこ

むことを意識していました。また web 上で ES を提出する機会も多かったため、リマインダーなどの通知アプリを用いて、忘れずに提出できるようにしていました。

(社会学部 4年生)

遠隔授業について、私は授業がゼミだけなので、少人数であることもあり、特に問題は感じませんでした。少人数授業の場合は、授業に遅れて入る時には、先生に入室許可頂けるよう伝えて欲しいなど、受講生同士が LINE などでもやり取りできるので、スムーズに授業に参加できたと思

います。就職活動については、通常のように時間に遅れないように現地に早めに行くなどができないため、時間には十分注意しました。就職活動はやはり対面の方がやりやすいと感じました。

(社会学部 4年生)

オンライン相談窓口SAからの報告

主に新入生の方からの質問にお答えしています。疑問点がしっかり解決するように、親身になって回答することを心がけています。一方で、課題が多すぎて辛いなどの SOS 的な質問に対しては、その学生さんの負担がどうすれば軽くなるのか、苦しさから開放されるのか、文面だけ

を読んで考えるのが非常に難しいと感じています。また、私たちに与った「当たり前」が、新入生にとっては「当たり前」ではないことも多くあるため、そういったところを補って回答するように工夫しています。

(文学部 4年生)

授業や課題、時には友達づくりについて、学生が日々不安に思っていることに関して相談を受け付け、これまでの学生生活での経験を踏まえて回答に応じています。1年次生からの相談が特に多く、この状況に不安を隠せない様子が伝わり、少しでも学生の心の負担を軽くできたら

という想いで取り組んでいます。同じ学生であるという立場を生かし、他の SA と協力しながら“学生に寄り添ったアドバイス”ができるよう努めていきたいです。

(経済学部 4年生)

オンライン相談コーナーは、学生の疑問や不安の解消を目標としています。その為に、いかに学生目線の回答ができるかを意識して取り組んでいます。質問者の意図を考え、求めている回答ができる様に、手助けとなる情報を収集します。それらをまとめる際に、読みやすい様に改

行や括弧を用いたり、参照元の URL を記載したりするなど、工夫を凝らしています。一人でも多くの学生の疑問や不安に寄り添い、微力ながら解消されればという想いで業務に取り組んでいます。

(商学部 3年生)

オンライン相談窓口では学部学科問わず様々な質問が日々届きます。そのため広く深い知識が求められますが、SA の所属学部が多岐にわたるので協力して乗り越えることができます。また学生生活を有意義に

過ごしてもらうようにヒントや手助けにもつながります。勤務を通して多様性のある意見が飛び交うことから協調性を高めることができます。

(理工学研究科 2年生)



■ 買うべきは 化粧品より 安カメラ
■ 直近で 会話をしたのは 前のゼミ
■ 添付された 参考動画は 映画『リング』
■ 寝過ぎた 講義が始まった 朝1限
■ 実験は リモートでは できません
■ その人の センスがわかる 背景
■ ウェブ講義 家から出ず 不健康
■ 視力が どんどん下がる オンライン
■ ビデオオフ 有りが無しかが 分かれ目か
■ 学生も 学校行かないや ニートかな
■ リモートで しっかりとくは 脂肪だけ
■ 遅刻した かと思いきや 録画授業
■ おやつ食べ 腹がならない 2限中
■ 発表時 資料置き場は カメラ横
■ 新習慣 授業の前の 部屋掃除
■ スマホ内 そびえたつのは 課題山
■ Zoom授業 まずは確認 ビデオオフ
■ あれこれと 気づけば授業 最終週
■ 娘さん 授業中の 父を訪ねて(66)
■ 翌日が 提出締め切り 今気づく
■ おかしいな 先生ミートに なってません?
■ 夜更かしで 間に合わなかった 一限目
■ 鉛筆と アイス片手の オンライン
■ 終了は チャイムから大の 鳴き声に
■ 教授との 1対1で 苦笑い
■ 電気代 交通費よりも かかる夏
■ 面接は 女優ライトで 通過増
■ オンライン 授業と面接 同時処理
■ Zoom授業 一緒に受ける ぬいぐるみ
■ 年間で 一〇〇万超の サブスク代
■ 足重い レポートズーム 太るのみ
■ タイピング 上達したが 口下手に
■ 接続と 受講態度は 紙重
■ 音でない 慌てずまずは 再起動
■ 見続ける ブルーライトが 目にいた
■ 課題来て 一難去つて また課題
■ テキストで 人の心ぞ はかり得ぬ
■ 執筆中 方針立たず 五里霧中
■ 今何時? 狂いまくった 昼と夜
■ 「スマホ見よ」息抜きできても 目がつらい
■ 定期券 払い戻して 回数券
■ 朝寝坊 遅めの昼寝 続く夜更かし
■ 二度寝して また二度寝しても 間に合った
■ 繋がらぬ ネット回線 人づきあい
■ 課題せよ 確認せよの メールだけ
■ 寝巻でも カメラオフなら 許される
■ 足りてない 金と会話と 太陽光
■ 金かかる デスク周りの アクセサリ
■ 忘れてる 提出期限と 通学路
■ 回線が落ちて パーチャル 神隠し
■ 実家へ帰るは良いが 光熱費
■ 帰省して いない下宿に 金払う
■ オンライン Wi-Fi切れて オフライン
■ 急上昇 締め切り当日 アクセス数



KANSAI
UNIVERSITY

関西大学 教育開発支援センター Kansai University Center for Teaching & Learning

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL: 06-6368-0230 FAX: 06-6368-1514

www.kansai-u.ac.jp/ctl/index.html

発行日/2020年8月27日 編集・発行/関西大学 教育開発支援センター